【例題】以下は「蜻蛉日記」の一節である。作者は夫が浮気をしている証拠を偶然見つけてしまう。これを読んで、後の問いに答えよ。

さて、九月ばかりになりて、出でにたる程に、箱のあるを、手まさぐりに開けて見れば、(1)人のもとにやらむとしける文あり。あさましさに、「『見てけり』とだに知られむ」と思ひて、書き付く。

Aうたがはしほかに渡せる文見ればここや途絶えにならむとすらむ

など思ふ程に、むべなう、十月つごもり方に、三夜しきりて見え a ぬ時あり。(中略)

これより、夕さりつ方、「⑦内裏の方逃るまじかりけり」と出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそこになむ止まり給ひぬる」とて来たり。(2)さればよといみじう心憂しと思へども、言はむやうも知らである程に、二三日ばかりありて、① 暁方に門を叩く時あり。(3)さなめりと思ふに、憂くて開けさせねば、例の家とおぼしき所にものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

B 嘆きつつ一人寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知る と、例よりはひきつくろひて書きて、(4)うつろひたる菊にさしたり。

(

問一 傍線部⑦「内裏」、①「暁」の読みを平がなで答えなさい。
② () ② () ② ())
問二 二重傍線部 a 「ぬ」と同じ助動詞を含むものを選び記号で答えなさい。
ア いかに久しき イ 憂くて開けさせねば ウ とまり給ひぬる エ 出でにたる程に
問三 傍線部(1)「人のもと」と同じ場所を示す語を本文中から抜き出しなさい。
()
問四 傍線部(2)「さればよといみじう心憂し」は作者のどんな気持ちが表れているか、説明しなさい。

)

- 問五 傍線部(3)「さなめり」の口語訳としてふさわしいものを記号で答えなさい。
 - ア それは間違いであるようだ。
 - イーそれしかなさそうな様子だ。
 - ウ 夫が訪ねてきたようだ。
 - エ 夫が来るはずだったのに。
 - オーそれは夫であるにちがいない。
- 問六 傍線部(4)「うつろふ」は霜にあたって花の色が変わるということである。作者が手紙を「うつろひたる菊」につけて贈ったことにはどんな気持ちが込められているか。 簡潔に説明しなさい。
- 問七 Aの和歌から読み取れる作者の気持ちとしてふさわしいものを後から選び、記号で答えなさい。
 - ア 浮気相手がいることを知って押さえきれない怒りを夫にぶつけている。
 - イ 浮気相手がいることは薄々分かっていたがやはり落胆を隠せないでいる。
 - ウ 浮気相手に気持ちを奪われ私を忘れてしまうのかと夫をなじっている。
 - エ 浮気相手を見つけられてとても慌てているのだろうと夫をからかっている。
- 間八 Bの和歌に使われている修辞技法としてあてはまるものを後から選び記号で答えなさい。
 - ア 枕詞 イ 体言止め ウ 倒置法 エ 掛詞 オ 縁語

【解 答】

問一 ⑦ だいり ① あかつき

問二 イ

問三 例の家

問四 夫が他の女の元へ通っているという予想が当たっていたという気持ち。

問五ウ

問六 菊の花が色変わりしたように兼家の気持ちも心変わりしてしまったということ。

間七ウ

問八エ

【口語訳】

さて、九月頃になって、夫の兼家が出て行った後に、そこに置いてある文箱を何の気なしに 開けて見ると、他の女の所にやろうとした手紙が入っている。あまりのことに驚きあきれて、 「せめて私が見たということだけでも悟らせよう」と思って、書きつける。

うたがはし……疑わしいことです。よその女におやりになる手紙があるのを見ますと、私の所へのおいではもう途絶えてしまうのでしょうか。

などと思ているうちに、案の定、十月末頃に、三夜続けて姿を見せない時がある。「わざとよ そよそしくして、しばらく君の気持ちを試していたんだ」などと(夫は)思わせぶりなこと を言う。

私の家から、夕方頃、(夫が)「宮中に避けられない用事があるんだった」と言って出ていくので、不審に思って、人に後をつけさせてみると、「町の小路にあるこれこれの所に、お車がお止まりになりました」と言ってきた。「(夫が他の女のところに通っているとは)やはり思った通りだよ」と、「まったくやりきれない」と思うけれども、なんと言ってやろうか思いつかないでいるうちに、二三日ほどして、夜明け方に門を叩く時があった。「夫が訪ねてきたようだ」と(私は)思うけれども、嫌なので門を開けさせずにいたところ、(夫は)例の女の家と思われる所に行ってしまった。翌朝、「このまま黙ってすますわけにはゆくまい」と思って、

嘆きつつ…… (あなたの訪れがなく)独りで嘆きながら寝ている、その夜の明ける までの間がどんなに長いものかあなたは知っているでしょうか。

> (戸が開くほんのわずかの時間さえ待つことのできないあなたには、 分からないでしょうね!)

と、いつもよりは改まって書いて、色変わりした菊にさして、夫に贈った。